
Hugging You!

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hugging You!

【Nコード】

N5732J

【作者名】

久芳

【あらすじ】

七海の通う羽生高校で、日常的に交わされる親しみをこめた挨拶は、ハグ 抱擁だった。いまだその習慣になれることのできない七海は、密かに思いを寄せている相手が、誰とでも抱擁を交わすことに苦痛を感じ始めていた。そしてある日、七海は雅行に、ハグをしないと宣言してしまう。

どちらからともなく、まるで吸い寄せられるかのように、二人は校門の前で抱き合った。

背の高い男子の首に腕をまわす女子の長い髪が、風にふかれて舞っている。折り目のしつかりついたプリーツスカートからのぞく脚は、朝日を浴びてまぶしく光っていた。

登校ラッシュで、生徒があふれている校庭。その中で二人は、公衆の面前にもかまわず熱い抱擁をかわしていた。

周囲の生徒も、教師も、それを気にすることはない。むしろ、そういう光景は校庭のあちこちで見られていた。

男子と女子、男子同士、女子同士、教師同士、教師と生徒。後輩や先輩も関係ない。みんな、顔を合わせれば当たり前のように抱き合っている。

先ほどの二人だって、今はもう離れてほかの生徒と抱き合っている。軽く腕を回すだけの軽いものもあれば、締め技かと思うほど力をこめているものもあった。

抱き合うとか抱擁とか、そういう固い言葉ではなく。ハグ、と呼ぶのが自然だった。

新学期が始まり、入学式があり、数ヶ月。ようやく学校になれ始めた一年生も、まだ積極的にハグができないようで、先輩からのハグに遠慮がちにこたえている。

まるで去年の自分を見ているようで、教室の窓からのぞいていたあたしの口からは、自然と笑みがこぼれていた。

大丈夫、すぐになれるよ。

「七海、^{ななみ}おはよ！」

毎日抱きつかれれば。

1

開け放った窓の枠に肘をかけていたあたしは、横からの衝撃に思わずよろめいた。

「おはよっ、おはよう七海！」

肘ごと豪快に抱き寄せられ、あたしは身体を支えきれず頭を窓にぶつけてしまう。いて、と呟くのも気にせず、彼女はあたしを抱きしめたまま頬をすりよせてきた。

「……おはよう、千鶴^{ちずる}」

今日も元気だね、とあたしは彼女　千鶴を抱きしめかえす。校庭に漂う若葉の香りをそのまま引き連れてきたらしく、一瞬、たんぽぽを抱きしめたような錯覚を感じた。

ハグ。それがあたしたちの通っている、羽生高校^{はぶ}の日常だった。なにかあるごとに、ハグ。おはようの挨拶にハグ。さよならの挨拶にハグ。おめでとうのハグに、ありがとうのハグ。理由もなくハグをしても全然かまわない。

決して校則というわけではないけれど、生徒も教師も、みんなごく自然にやっていること。毎年入学式には「I Hug You！」と愛の告白にかけた文字が各教室の窓に一文字ずつ貼られて、新入生歓迎の言葉にしているぐらい、ハグは学校に溶け込んでいた。

他校から『ハグ高』と呼ばれるほどに有名で、それを目当てに入学してくる生徒は毎年増加する傾向にあるらしかった。

「……ちよつと、ハグ長すぎない？」

抱きついたまま離れない千鶴を、あたしは引き離しにかかる。彼女と違つて、あたしは家に一番近いからこの学校を選んだのだった。「もういいでしょ、離れてよ千鶴」

「だって、七海にハグするの好きなんだもん」

今、誤解を招く発言をしなかったかな？

「七海、チヅみたいに筋肉ばっかりじゃないんだもん。筋肉の上に適度な脂肪があつて、なで肩でさ。色も白いし、いいにおいだし」

小中とバレーで鍛えてきた千鶴の筋肉は、高校へと継続された部活動により、さらにたくましくなっている。それでも小柄でよく動き回る彼女は子犬のようでかわいらしく、短く切った髪は思わず撫でたくなるようなやわらかいくせがあつた。

「ね？ 雅行^{まさゆき}」

好奇心旺盛な丸い瞳が、ふいに、今まさしく教室にはいつてきたばかりの彼に向けられた。

突然話をふられた男子

雅行が、軽く目を見開いてとりあえず鞆を自分の席に置く。窓際が一番後ろが雅行の席。その前があたし。隣が千鶴と、縁があるのか二人とは一年のときから席が近かつた。

今までのあたしたちの会話から自分が出すべき答えをはじき出すまでけっこうな時間をかけて、彼は大きくひとつあくびをする。何をしたのか、そのつんつん頭には葉っぱがついていた。

「……その答えかたによつちゃ、俺が変態になるぞ」

まじめに引き締められた切れ長の眼が、言い終えてからにやりと笑う。そして彼も、あたしにハグをしてきた。

「オハヨ、七海」

千鶴ほど熱烈ではないけど、それでもしつかりと力をこめて抱きしめてくる。ほかの男子は女子に遠慮して軽く腕を回す程度なのに、彼は誰に対してもしつかりとハグをしていた。

「……おはよう」

かすかな痛みを感じながら、あたしはその広い背中を叩いてハグ

をかえず。そして振りほどいたように見えないように、まだハグに不慣れであるように、すぐに雅行から離れた。

「もう二年なんだし、いいかげん七海もなれるよ」

いつもの言葉に曖昧に笑いながら、あたしは千鶴と雅行のハグを見た。

同じ中学出身で、気心の知れている二人は、ハグに遠慮がない。

二人がやるととても自然で、大好きです、とお互いに言っているようなあたたかい抱擁だった。

痛い。

「……七海？ どした？」

よほどあたしが変な顔をしていたのか、千鶴と離れた雅行が心配そうに長身をかがめてくる。決して自分からそらすことのない瞳が、まっすぐにあたしを見ていた。

「なんでもない。雅行、頭に葉っぱついてるよ」

笑顔を作って、あたしは自分が唇を噛もうとしていたことに気づいた。雅行の頭に手をのばして葉っぱをとると、彼は「もうない？」とさらに頭を寄せてくる。

「なんでこんなに葉っぱついてるの？ 制服にもだよ？」

「近道使ったんだ。誰かの家の庭、突き抜けてきた」

すべてとり終えると、雅行が顔をあげる。にこりと笑う唇から白い歯がのぞいて、彼は両手をあたしにのばした。

「ありがとう」

予想外のハグに、あたしは身体をそのまま預けてしまった。

制服ごしの彼の胸板に、頬がくっつく。染みついた新芽の緑と、歯磨き粉の香りが混ざり合ってあたしを包む。背中になわされた手が、とても熱い。

痛い。

今度こそあたしは、雅行をふりほどく。突き飛ばしたといっても
いくらいの力で、彼の長身がぐらりとよろめいた。

「七海……？」

驚きの表情を浮かべる雅行に、あたしは口を開く。声がかすれて、
ぱくぱくと動いた唇はほとんど言葉にならなかった。

「あたし」

もう一度。今度ははっきりと声を出す。駄々っ子みたいに高い声
は語尾まではねあがって、自分でも驚くぐらい教室に響いた。

「あたし、もう、ハグしない！」

雅行と、ハグがしたくない。

この学校でハグをしない理由はいろいろあるけど、おおまかに分ければ二つにまでしぼりこめる。

人が苦手か、恋愛がらみかのどっちか。

潔癖症とか、対人恐怖症とか、そういう人はめったにこの学校を選ばない。だからあたしのハグしない宣言は、恋愛がからんでいるのがばれただった。

あたしたちのクラスには、彼氏がいるから、ほかの男子とはハグしないと明言する子がいる。ハグを恋人のためだけにとっておいている人は学校にたくさんいる。残念ながら、あたしに恋人がいるという情報はどこからも流れていない。

誰かに想いを寄せている生徒も、ハグを拒むことがよくある。それが相手への宣戦布告のようになることもあるし、気を引くための行動ともされている。あたしはそのつもりがなかったのだけど、自分のやった行為は、まさしくそれにあたってしまうわけ。

雅行が好き。そう、みんなの前で宣言してしまった。

当の本人は、意味がわからず『……え？』とぱちくりしていたけど。

ななみ？ と続いた雅行の声は本鈴にかき消されて、結局あたしの宣言は曖昧に終わってしまった。

S H R、基礎学習、現代文と、時間は無情にも淡々と過ぎていく。あたしはもう雅行と話せないかもしれないと不安になり、隣の席でちらちら視線を投げかけてくる千鶴にも曖昧な笑みを返すしかなか

った。

けれどその心配は杞憂だったようで、三時間目の家庭科が終わりに近づいたころ、あたしは後ろの席からペンで背中を小突かれた。

「七海、七海」

雅行だ。そう思うと、身体から変な汗が吹き出てくる。こわばる身体をきしませながら、あたしはおそろおそろ振り向いた。

「……なに？」

「プリント見せて」

お願い、と目を細める彼の頬には、今まで寝ていたらしく教科書の跡がくつきりとついている。はじめのころに配られたプリントのことはもう黒板に書いていなくて、ずいぶん前から寝ていたのだなとすぐにわかった。

プリントを渡すと、すぐ返すから、とうつしにかかる。緊張した自分があほらしいと思うぐらい、雅行の態度はいつもと変わらなかった。

『もともと七海、ハグ好きじゃなかったからな。無理強いしないし、別にいいよ』

戻ってきたプリントのすみに、あまり上手とはいえない文字でそう書かれている。しかも鉛筆ではなく、赤いボールペンでだ。授業の最後に回収したらどうしてくれよう。

どうやら彼は、あたしの宣言を『誰ともハグをしない』と受け取ったらしい。後ろを振り返ってみれば、無邪気に小首をかしげてる。

鈍い。

あたしは安堵とともに、脱力してしまう。

この数時間で、すっかり胃が痛くなってしまったのに。ストレスで肌が荒れそうだったのに。

一緒に落書きされたいinchきドラえもんに、あたしはのび太君になって、涙を出してすがりつきたい。

タイムマシーンを出して。

そうしたら、あんなこと言わないから。痛くても我慢するから。
雅行がほかの子とハグしても、あたしとハグしても、痛いなんて
思わないから。

「やっと進展したね、七海と雅行」

千鶴に言われて、あたしはひとつ、ため息をついた。

「あんなことしなければよかった……」

「いんじゃない？ いい加減見てるこっちがイライラしてたからね、
動いてくれてよかったとチツは思うなあ」

視線は決してこちらに向けず、千鶴はしゃんとまっすぐ立っている。
あたしはもう一度ため息をついて、パンツが見えないよう注意
しながらしゃがみ、ボードにあごを乗せてばんやりと人並みをなが
めた。

羽生高校の生徒がよく利用する駅。駅前はいつも人通りが多く、
みんなあたしたちをしげしげと珍しそうに眺めていた。

あたしたちと同じ濃紺のブレザーが、駅前や近くの街をちらほら
と歩いている。その手にはそれぞれスケッチブックや厚紙、ベニヤ
板やダンボールでつくったボードを持っている。それを高く掲げた
り、胸の前に構えたりして、みんな思い思いに道行く人たちにアピ
ールしていた。

帰宅途中の生徒にまぎれているけど、ボードを持っているのがあ
たしたちの仲間だ。書きかたや色合いは十人十色だけど、そのボ
ードにはひとつだけ、共通している言葉がある。

FREE HUGS

あたしや千鶴、それからボードを持つ仲間たち。あたしたちはみ
んな、羽生高校の『FREE HUGS 同好会』に所属していた。

FREE HUGS。あたしがその存在を知ったのはけっこう最近だった。

FREE HUGSとはなにか。それを説明するのはちょっと難しい。なぜなら受け取りかたが人それぞれで、一概にこうだとは言いきれないものだから。

街頭で見知らぬ人と抱擁を交わす。それによって互いの喜びや悲しみを分かち合ったり、あるいは愛や平和を生み出そうとしたりする活動。と、ネットでは説明されていた。

人それぞれ感じかたが違うのだから、みんな何かしらの理由や目的があつてすることで。漠然と言つてしまえば、ハグをすることです。『なにか』を感じあう行動、とでも言つてしまおうか。

その活動が今、世界中に広がるうとしていた。活動の一員であるはずのあたしは、実はまだ、自分がなんのためにしようとしているのかよくわかっていない。

ただ、千鶴やほかのメンバーに見せてもらったネットの動画を見て、たとえようのないあたかい気持ちに胸にこみあげてきたのは確かだった。そしてあたしもやろうと決意して、同好会に入つたのはいいけれど、実際はまだあまりハグをすることができていない。

同好会の活動といえば、だいたいこうやって、人通りの多いところで人々とハグをすることだった。あたしもこうしていつも千鶴の隣に立ち、ボードを持ってアピールしている。何度か道行く人とハグをしそうな気配があつたこともあつたけど、その場になつて急に足がすくんで、みんなかわりに千鶴とハグをすることになつていた。あたしのことを置いて、実際にハグをしてくれる人がいるのかといえば、とりあえずたくさんではない。まだこの地域には、あまりFREE HUGSが浸透していなかった。

ほとんどの人はあたしたちを怪訝そうな目で見て通り過ぎ、あるいは無視して、別の人は指をさしてげらげらと笑っている。いわゆるハグ高を知っている人たちはああほらと興味を示していたりするけど、いざハグしてくれるのはほんの一握り。ボードを持つあたし

たちから無理にハグしたりするのではなく、むこうから来てくれるのを待つのがF R E E H U G Sだった。

人間、そう簡単に見知らぬ人と抱擁を交わすことなんてできない。その気持ちはあたし自身がよくわかっている。

家族とハグできるかと訊かれたら、あたしはできないときっぱり答える自信がある。恥ずかしい、照れくさいで頭がいっぱいになって動けなくなる。もちろん親だって、突然娘に抱きつかれたら驚くに決まってる。

家族とできないことを、何も知らない人とさも当たり前のようにする。そのことに、羽生高に入学したてのころのあたしはとても抵抗を感じていた。なんでみんなそう簡単にハグできるのか、理解できずにただただ戸惑っていた。

けれど毎日のように学校でハグするうちに、なんとなく、その心地よさのようなものがわかってくるようになった。おはようの挨拶と一緒にハグすると、自分がとてもやさしい気持ちになれた。お互いのあたたかさが混じりあって、言葉にはできないなにかを分かち合えるようになったとき、あたしはハグが嫌じゃなくなった。

たとえば、千鶴とハグしたとき。お互い腕をまわして抱き合ったとき、胸の中が嬉しさのような喜びのような、あたたかいものでいっぱいになる。壁のようなものがなくなって、なぜだか涙まで出てきそうになることもあった。ぎゅっと抱き合うことで、自分の抱えている小さな悩みやもやもやが、すっと溶けてなくなってしまいうな、そんな癒しがあった。

でも、それをF R E E H U G Sでも同じようにできるかということあたしにはまだ難しくて。お互いを知っているからこそハグができるわけで。千鶴のように街頭に立って知らない人とハグする勇氣は、あたしにはまだ、足りていない。

今のところ、活動の最中にハグをしに来てくれるのは、同じ学校の生徒が大半だった。あとはテレビやネットでF R E E H U G Sを知った人。それから、あたしたちを見て好奇心をかきたてられた人。

そもそも同好会ができたのだって今年の春。結成わずか数ヶ月なのだから、地域にも学校にも、浸透するにはもう少し時間が必要だ。

「……ねえ、千鶴」

「なあに？」

話しかけると、千鶴は興味を示している少年に、腕を広げてアピールしていた。あの学ランは近くの中学校だ。FREEHUGSの存在を知っていたようで、行こうか行くまいか悩んでいるらしい。千鶴は視線をおくるあたしにちろりと舌を出して、そつと彼に近寄っていった。

少年は千鶴に、不安と期待が入り混じった顔でなにやら訊いている。たぶん、この活動が自分の知っているものと同じなのか確認しているのだと思う。そしてそれに千鶴は大きくうなずいて、ふたりは両手を広げてハグをした。

学校ではいつも見慣れている光景だけど、それこそ今は本物の公衆の面前。突然のハグを見て驚く人もいれば、冷たい視線を向ける人もいて、そして中には微笑んでくれる人もいた。ほかの場所では学生たちみんなでハグするから、まるで人だんごのようになってしまっている。

晴れ晴れとした笑顔で戻ってきた千鶴は、あたしの表情のひどさに肩をすくめて、同じように隣にしゃがんだ。

「そんな顔してたら誰もきてくれないよ？」

「今はそんな気分じゃないの」

じゃあなんで今日の活動に参加したのか。こうして千鶴と話をしたかったからだ。

「ねえ、千鶴」

「だから、なあに？ どうせ雅行のことでしょ？」

とうの雅行も、同好会の会員だ。けれど本日はお休み。学校祭前

なので、本業の生徒会の活動で忙しそうだった。

同好会はほかの部活にはいつていてもできるから、千鶴や雅行のようにかけ持ちしている人も少なくない。会員は地道な呼びかけで少しずつ増えてきているけど、学校のハグと外のハグは違うもの。そんなに多くは集まらなかった。

ちなみにあたしは、同好会以外に何もやっていない。

「まあ、そうなんだけどさ」

「いいじゃん。七海がああでもしなかったら、たぶん卒業するまであのまんまだったと思うよ？」

千鶴は前から、あたしの気持ちを知っていた。一年の冬休みに彼女の家に泊まったときに、『七海って雅行のこと意識してるでしょ』と言われていた。そのときあたしは否定しなかったし、千鶴もそれ以上何も言わなかった。その後も、変に仲を取り持とうとしなかった。

お互い今までそれについては深く触れてこなかったから、いざ話をするとなると、どうしていいのかよくわからなくなってしまふ。

「雅行はにぶいからね」。告白するなら七海からじゃないとだめだね、きつと」

「告白、かあ」

だめだ、ぴんと来ない。ついにあたしは頭を抱えた。

雅行のことは好きだ。それだけは確信している。だからといって、それでどうこうするつもりはない。告白して、ふられて、お互い気まずくなるなんて絶対嫌だった。

だからこのまま卒業まで、仲良く友達をして、ハグをして、話ができればよかったはずなのだけど。

「なんであんなことしちゃったんだろう……」

「やきもちでしょ」

ずばり。千鶴の言葉はど真ん中だった。

「雅行がほかの人とハグするのが嫌だったんでしょ？ それと同じように自分もされるのが嫌だったんでしょ？」

そう。まさしくそのとおり。

だからといって、あたし以外の人とハグしないでなんて言えるわけがない。そんなのあたしのわがままで、雅行に押し付けるべきことではない。

そもそもあたしは、雅行の彼女でもなんでもない。ただのクラスメイトで、ただの友達。あたしもそれを望んでいた。

「……頭がぐちゃぐちゃになる」

「やってしまったことはもうどうしようもないんだし、前向きに考えようよ？」

ねっ、と千鶴があたしを立ち上がらせる。そしてひとつ、ハグ。やわらかくて力強い腕に包まれて、千鶴の香りでいっぱいになる。彼女の腕の中にいると、あたしはいつも心にエネルギーをもらえるような気がした。

「ねえ、千鶴」

「なあに？」

「FREE HUGSやってて、変な人に触られたこととかないの？」
「あるよ」

さらっと言って、千鶴はあたしから離れた。

そしてそのまま、ボードを掲げて人の波に飛び込んでゆく。ボードに興味を示した人がいたようで、その場で膝について大きく手を広げ、相手が来るのを待った。

ややあつて、腕の中に小さな女の子がとびこんできた。

前に見た動画もこうだった。ハグをする人同士がみんな笑顔で、あたたくくて、見ているこっちまで胸がほっとするような、そんな優しい気持ちでいっぱいな光景。それが今、あたしの目の前に、ただしかに存在している。

女の子は満足したようで、お母さんのもとに戻ってゆく。それにばいばいと手をふって、千鶴もまた、あたしのもとに戻ってきた。
「今みたいに無邪気にしてくれるならいいんだけどね。あつたよ、離してくれないことか」

「そのとき、どうしたの？」

「啓一けいちと一緒だったから、助けてもらっちゃった」

えへつと千鶴は舌をだす。あっけらかんと、実に彼女らしく全然気にも留めていなかった。

「だってそれ以上に、楽しいんだもん。ありがとうとか言ってもらったらもう、胸触られたこととかどうでもよくなっちゃう」

かといって千鶴は、あたしにFREEHUGSを無理強いしてくることがはない。同好会に引張ってきたのはまさしく彼女だけど、あたしが自分からできるようになるのを見守っていてくれた。

「あ、啓一だ」

おい、と千鶴がボードを持った男子に声をかける。すると彼はこちらに気づいて、人の波をかきわけ駆け寄ってきた。

そしてそのままの勢いで千鶴を抱き上げ、ラブロマンス映画のワシーンみたいにくるくるとまわる。さすがにこれには、あたしも周囲の人たちも驚いていた。

本家本元。彼 啓一くんこそが、この同好会の会長だ。

「よ、なっちゃん」

「こんちわ」

同級生のわりに、啓一くんには妙な落ち着きがある。銀縁眼鏡に長めの前髪を斜めにたらし、きつちりブレザーを着ていると、雅行と同じものを着ているとは思えないぐらいに大人びていた。

啓一くんはあたしを見て、ちょっとためらう様子を見せた。だからあたしは、自分からハグをする。もちろん千鶴がしていたような熱烈なものではなく、軽く腕をまわすハグだ。

同じハグ高の生徒には、駅前でも、学校の延長のような感じで、気軽にすることができた。

こうしてハグしてみると、やはり雅行は背が高いのだなと思う。ハグする力も、啓一くんは遠慮がちだった。身体もすぐに離れた。

「なっちゃん、今日、誰かとハグした？」

「七海と学校の子たちと、啓一くんだけ」

それに、啓一くんは笑うだけだった。そっかそっかと笑って、きてくれてありがとうと言う。礼儀正しい彼はパソコン部に所属していて、たまにFREEDUGS活動の様子を動画や写真に撮ってはネットで公開しているようだった。

「チヅたち、そろそろ帰るね」

「気をつけるよ」

同好会の主な顔はこのふたりだ。その補佐にあたしと雅行がいるような形になっている。一年生はまだ学校になれたばかりだし、三年生は受験が待ち構えているので、同好会をまとめる余裕がなかった。

「チヅのクラスは学校祭どうすんの？」

「チヅたちは模擬店だよ。でもチヅは女バレのほう行くから、詳しいのは七海のほう」

一年生の宿泊研修が最近終わった。そうしたらもう次の行事は学校祭。だから雅行も忙しいし、同好会の集まりだって悪い。そもそも千鶴だって、高体連の練習はどうしたんだろう。

いくつか会話をしたあと、啓一くんはそれじゃあとあたしにお別れのハグをした。

そして、千鶴にハグ。

じゃあねと手を振って、あたしたちはそれぞれ、ボードをスクールバッグの中にしまいこんだ。

「おっす、おつかれ」

「あ、雅行」

生徒会が終わったらしい。雅行もご帰宅のようで、あたしたちに気づいてやってきた。

「どう？ 執行部、順調？」

「微妙だな」

苦笑しながら、彼は千鶴にハグをする。ボードはもう片付けてしまったけれど、同じ学校の生徒なら、校外でもハグするのは珍しくなかった。

「今日はなにもなかったか？」

あたしにハグをしようとして、雅行は寸前で止める。朝のあの発言を思い出して、舌を出してごめんと笑った。

「うん、大丈夫。別に止められたりしなかったよ」

「そっか」

同好会ができて初めて外で活動したとき。あたしたちは見事警察官にとめられた。何も知らない人たちから見ればFREEHUGSは十分怪しい活動で、高校に連絡が行ったことも何度かある。最近ではそれもなくなってきたほうだけど、同好会は数々の問題があったおかげで、今年の学校祭は出展の許可がおりなかった。

「雅行もハグやってくの？」

「いや、もう帰るよ。千鶴も同じ時間ので帰るんだろ？ 七海は電車乗らないからいいよな」

「わざわざ乗り継いでまで羽生高選んだ雅行たちのほうが珍しいんだよ」

あたしを見る雅行の目が、すこしばかりいつもと違う。なにかを言いたくて、でも我慢しているようなそんな感じで、あたしは居心地悪く身じろいだ。

もしかしたら、啓一さんとハグしていたところを見られたのかもしれない。

「じゃあ、また明日ね」

雅行の視線から逃げるように、あたしはふたりに背を向けた。

雅行のことを意識しはじめたのはいつからだろう。考えて、あたしはすぐに答えが出た。

ちょうど一年前の、今ごろ。学校祭前だった。

入学当日から、ハグ・ハグ・ハグの嵐。

噂には聞いていたけれど、予想を上回るハグの多さに驚いていたあたしが、ようやく学校になれてきたのは六月の宿泊研修が終わったところだった。

けれどそのときはまだ、自分からハグをすることはめったになかった。まだまだ、ハグという行為を受け入れることができずにいた。校門をくぐって、途中で千鶴に会って、ハグ。教室の道までに千鶴の先輩に会ったときは、後ろでにこにこ千鶴たちのハグを見ているだけだった。

そして教室。ガラツと扉を開けたなり、あたしの目の前には雅行が勇ましく仁王立ちしていた。

雅行とはあまり関わりがなかった。千鶴と同じ中学校ということでは何かしら交流はあったけど、さほど仲良くもなかった。そんな彼があたしの前に立ち、鋭い視線で見下ろしてきたかと思うと、ふいに愛嬌のある笑みを見せてあたしにおはようと言った。

『あ、おは』

返事をするよりも早く、あたしは雅行にハグをされていた。

力強い腕に抱かれて、身体がびったりと雅行にはりついた。彼の体温と、香りと、胸の音に包まれたのはほんの一瞬のことだったけれど、離れてもその余韻はいつまでもあたしの身体に残っていた。

驚きのあまり硬直したあたしに彼はもう一度笑ったかと思うと、千鶴とハグをし、すぐに離れて続々と登校してくるクラスメイトに片っ端からハグをしまくっていた。

なんかこのクラス全然ハグしてない。そう思い立った雅行が、登校してきたクラスメイト全員にハグをしたのだと、あとで千鶴に聞

いた。

それにがっかりしたときには、もう気になっていたのだと思う。雅行のおかげでクラスは次第に積極的にハグをするようになり、彼はクラスでも支持を集める人気者になったのだった。

あのとき雅行が全員ではなく誰か特定の女子一人にハグをしていれば、今ごろ彼には彼女ができていて、あたしがこんな思いをしていたこともないと思う。

はじめは雅行とハグできることが嬉しくて、毎朝それが楽しみだったのだけど。それがいつしか苦痛に変わるなんて、まったく思っていなかった。

「七海、ちよつと」

学祭準備で教室に残っていたあたしは、その声でようやく我に返った。

「ねえ、七海ってば！」

ばんばん、と、机を手で叩かれる。顔をあげれば、そこにはぶくつと頬をふくらませた千鶴がいた。

「学祭の打ち合わせしようって、朝にチツ言っただでしょ！」

「あ……ごめん」

千鶴は水色の指定ジャージを着て、袖口や顔のいたるところにポスターカラーのインクをつけていた。女バレの作業を抜けるのには少ししか時間がないから、時間厳守と言われていたはずなのに。

「どうせまた雅行のこと考えてたんでしょ」

「千鶴さまにはすべてお見通しですね」

あたしは席を立ち、千鶴に続いた。

学校祭までのカウントダウンも、ようやく一桁になってきた。羽生高の学校祭は、ひと学年のクラスが多いことから、学年ごとにやることが決まっている。一年生は後夜祭で飾る大行灯の製作。

二年生は模擬店。三年生はステージ発表でのパフォーマンス。最後の順位づけは、全学年ではなく、学年ごとに決められる。

そうやってそれぞれ分担させるのは、各部活動でもそれぞれ学校祭活動があるからだ。部活の出し物はほとんど屋台などの金銭物が多く、その売り上げはどれも部費にあてるようになってる。そうすると部活動の生徒はそちらに力を入れるわけで、自分のクラスの活動が多いと大変になる。だからそれぞれクラスの出し物はひとつと決めて、生徒に負担がかからないようにはからっての役割決めだった。

二年生は模擬店。あたしたち2Bはお菓子系にはしるらしい。男子は主に店の飾りつけと調理。華やかな女子が売り子と宣伝。部活動に所属しないあたしはもっぱらクラスの模擬店に専念するほうでメニュー表のデザインなどこまごましたものを受け持つことのほうが多かった。

ちなみに、千鶴たち女子バレー部も屋台だ。

「先輩たちをお願いして抜けるの大変なんだからね」

「ごめんごめん。早く行こう」

廊下に出れば、模擬店の飾り付け準備や大行灯の材料運びやらで、あちこちに道具やダンボールがちらばっている。行き来する生徒も多く、あたしたちはその間をぬって歩かなければならない。

それぞれ大変だけど、何より忙しいのは生徒会執行部だ。なんていったって、当日のスケジュールを管理するのが仕事なのだから。雅行も最近は何と何とのように、クラスメイトにハグしながらそのままもたれかかることも多くあった。

千鶴に腕を引かれて、あたしは一階の談話室に向かう。その途中、声をかけてきたのは啓一くんだった。

「よ。順調？」

「まあまあかなー」

そっちはどう？ クラスの情報交換をしつつ、あたしたちはそれぞれハグを交わす。今年のパソコン部は、学校祭前から羽生高ホー

ムページに特設サイトをつけて、そのサイトで宣伝していた商品を当日にオークション販売するらしい。

「啓一くんは当日、当番どうなってるの？」

「当番も何も、パソ部は実際ほとんど活動しないんだ」

よくよく話を聞いてみたら、オークションは学校祭期間限定の生徒限定で、終了後高値がついている生徒に品物を渡すというものだった。プログラムやらなにやらで学校祭前は大変だけど、当日は部屋にこもって交代でオークションの見張りをすればいいだけなのだろう。

「女バレも今年は気合入れてるみたいだな」

「まあねー」

笑う千鶴の頬にはポスカがついている。それをぬぐう啓一くんは実に紳士で、千鶴もそれに照れくさそうに笑っていた。

「当日になったら手が空くから」

「うん、わかった」

じゃあね。またハグをしようとする啓一くんの身体を、誰かが横から突進してさらっていった。

「俺も談話室で寝かせてくれー」

「ま、雅行……」

その大きな身体でよしかかるものだから、さすがに啓一くんも重たそう。目の下にぼっこりくまのできた雅行は疲労困憊といった様子で、学祭準備のストレスもそうとうためている。あたしたちの姿を見てすつとんできたのだろっ、目には涙まで浮かんでいた。

「頑張れ、雅行」

啓一くんも、男子には冷たい。首根っこにしがみつく雅行を引き剥がして、今度こそじゃあねと千鶴にハグをする。

「じゃあね、なっちゃん。頑張っつて」

「うん……」

あ、と気づくには遅く、啓一くんはあたしにもハグをした。

雅行はよろめきながらも、ぼつちりそれを見ていた。啓一くんは

千鶴からあたしの一部始終を聞いていたはずなのに。いまさらながらそれを思い出したらしく、耳元でかすかに「あ」という呟きが聞こえる。

けれど啓一くんは、何事もなかったかのようにあたしから離れた。ここで下手に動けば雅行に感づかれる。こっそりあたしにウイंकをして、今度は雅行とハグをした。

あたしたちも何食わぬ顔で、談話室へと入っていった。

「……ハグ、しないんじゃないかったのか？」

やっぱりというかなんというか、雅行は作業の手を止めずに、あたしにそう尋ねてきた。

学校祭前々日。授業は今日までで、明日は完全に準備時間になる。すでに放課後になり、学校全体がフライングだけれど学祭準備を始めていた。

生徒会執行部は連日作業に追われていて、早くも放課後から会場の飾り付けを始めるらしい。あたしは色とりどりのセロファンを大量に抱えて廊下を疾走する雅行に運悪くつかまり、問答無用で手伝うことになってしまった。

どうやら、廊下の蛍光灯の下にセロファンを貼って、明かりの色を変えるらしい。脚立にのぼって貼り付ける雅行に、あたしはセロファンやテープを渡していた。

職員室の手前まで作業がすすんだので、突然先生たちがドアを開けて出てくるからびっくりする。中には作業中のあたしたちに「頑張れよ」と声をかけたりハグをしてくれる先生もいた。

「聞いているか？ 七海」

「聞いているけど、このセロファン破れちゃってるよ」

彼に渡すつもりだったセロファンをテープで補修しながら、あたしはついに来たと内心身構えた。

あの『ハグしない』宣言以降も、あたしはハグをしている。雅行とはしていないけど、同好会の子とは普通にしているし、クラスメイトとだってしている。その様子を雅行は見ているわけで、どうも腑に落ちずに今まで悶々としていたのだろう。

いや、本来ならこれでいい。あたしは雅行とハグがしたくないだけで、ほかの人とはしても大丈夫なのだから。でも雅行はあたしが誰ともハグをしないものだと思っているわけで、だからあたしの行動は矛盾していると思っている。

「七海、ハグしないんじゃないかったのか？」

同じ質問を、彼は繰り返す。あたしは答えずに直したセロファンを渡したけど、それを貼る彼は、この話をしないと気がすまないらしい。

「なのに普通に千鶴とかハグしてるし、嫌だったらはっきり言ったほうがいいって」

そしてやっぱり勘違い。

「なんだったら俺から言ってやろうか？」

「いいよ」

居心地の悪さに、あたしはついそっけない返事をしてしまう。自分でもわかるぐらい、胸の鼓動が早くなっていた。

貼り終えたセロファンがはがれないか確認して、雅行が脚立から降りる。真正面に立って顔を覗き込んでくるので、あたしはとっさに顔をそむけた。

「いいよって、それじゃあ七海このままいやいやハグ続けるのか？」

「ストレスたまるぞ？」

「これで全部終わった？」

一階の廊下が全部終わったのを確認して、あたしは脚立をたたんだ。

「七海……」

「じゃあ、あたし模擬店戻るから」

テープと脚立を雅行に渡して、あたしは踵を返す。これ以上話を

していたら、本当に泣き出してしまいそうだった。

「待てよ」

体育館のほうから、女バレのにぎやかな笑い声がしてくる。職員室に用があるみたいで、赤いジャージを着た数人の一年生が、わいわい話しながらこちらに歩いてきた。

「七海。ちゃんと話、しようよ」

雅行に手首をつかまれて、あたしは戻ることができない。振りほどこうとしたけど、できない。力が強かった。

雅行に気づかれないよう、あたしはそつと深呼吸をする。吐き出した息がふるえた。

言えば楽になるだろうか。そう思っけど、どうしても声が出ない。雅行の反応がこわくて、どうしても言い出せない。

口を開けば、別の言葉が出た。

「……あたし、もうハグしないから」

「してたじゃん、ずっと」

「雅行と」

えっ、と。彼はそう言いたかったのだと思う。でもそれは声になりきれず、息づかいだけが聞こえた。

あたしは雅行を振り向き、顔を見ようとして、できずに視線を足元に落とした。近づいてくる女バレの子たち。手にはたくさんプリントを抱えていた。

「……わかった」

その子達が、こちらに気づく。なにやら不穏な空気を察したのか、話し声がいくぶん小さくなった。

「じゃあ、俺ももうハグしない」

手首をつかむ手に、力がこもる。その痛みに、あたしは涙がにじんだ。

つかまれた痛みではない。いつものあの、胸を刺す痛みだ。自分から言い出したことだというのに、涙が出そうになる。泣くまいと唇を噛むと、ふいに雅行があたしを引き寄せた。

この学校で、そんなことされるのは当たり前。だから遅れて走ってきた女バレの子も、あたしたちをちらりと見て、驚きもせず過ぎていった。

あたしは雅行に抱きしめられていた。

驚きに硬直して、あたしは雅行を振りほどくことができなかった。はつと我に返ってみても、腕の力がまた強くて、そう簡単に抜け出すことができない。

今まで、雅行にこんなに強くハグされたことはなかった。千鶴に比べたら全然なのに、息がつまるほど、苦しい。

「俺、七海以外とハグしないから」

ほんの一瞬のことであるはずなのに。雅行が離れるまでの時間が、とても長く感じられた。

「だからもうほかのやつとハグしない。手伝ってくれてどうもな。

二階は一人でやるから」

離れた手は、あたしが抱きしめてくしゃくしゃになったセロファンを抜き取る。雅行は何事も無かったかのように、脚立や道具を拾い上げ、いつものゆったりとした歩調で二階へと歩いていった。

しつれいしまあすと、間延びした声で職員室に入っていく女子たち、入る寸前、あたしをちらりと見ていた。

学校祭前日。みんな準備のために、いつもより早く登校してきていた。

あたしもすこし早めに登校して、教室ではなく談話室に向かった。作業を進める時間が足りなくなってきたからだ。

一度教室に行って荷物を置こうか迷ったけど、雅行と鉢合わせるのがこわくて逃げてしまった。下駄箱に外靴があつたから彼はもう登校済みだけど、きっと生徒会の仕事をしているから教室にはいないはずだった。

予鈴が鳴った頃には帰ってくる。そのとき雅行は、みんなへの挨拶をどうするつもりなのだろう。

『俺、七海以外とハグしないから』

その宣言が本当なら、きっと雅行はみんなのハグを拒否する。ただでさえあたしの宣言があつた後のことで、クラスもそれなりにあたしと雅行の關係に気を配っているというのに。これ以上変化があったら、それこそ視線がこわい。

千鶴はまだ、学祭準備にはいれない。女バレはたしか早朝練習中で、外からかすかにランニングの音が聞こえてくる。

ケータイをマナーモードにしないと。視線を画面に向けながら談話室の扉を開けると、ふいに声をかけられた。

「おはよう、 なっちゃん。 早いね」

「……おはよう」

啓一くんだった。

彼はソファ―に座り込み、長テーブルの上に置いたノートパソコンを覗き込みながら朝ごはんを食べていた。コーヒ―牛乳のストロ―をくわえながら、あたしを見てにこりと笑った。

「邪魔だったら出るけど？」

「ううん、平気。むしろあたしのほうこそ、邪魔だったら出てくけど……？」

大丈夫、と言いながら啓一くんがサンドイッチをかじる。おはようのハグをする気配はなく、あたしもそのまま向かいのソファ―に座った。

「ごめんね、行儀悪くて。でも朝ごはん食べないと力でないんだよ」「もしかして、いつも朝ここでご飯食べてるの？」

「いや、今日だけ。昨日ビラ配りして疲れてさ、寝坊してあわててずっとできなかったんだよね。朝のうちにやりたいことあったからさ」眼鏡をくいとあげて、真剣なまなざしで啓一くんはキーボードを叩く。作業の邪魔をしないよう静かにしていようかと思ったけど、意外にも彼のほうから話しかけてくれた。

「そっち、順調？」

「なんとかね。学校祭には間に合わせるよ」

「女子は細かい作業で大変そうだね……」

応接セツトの長いテーブルに次々道具をならべていくあたしを見て、啓一くんは目を細める。どうぞ、とアーモンドチョコレートを一粒くれた。

「こつちもなんとかすすんでるよ。僕らも肉体労働でへとへとだけど、学校祭が明日だと思うと、なんだかドキドキしてくるんだよね」あいかわらずパソコンをにらんだまま、啓一くんは淡々と喋る。

いつも穏やかな彼がドキドキする様子なんて思い浮かばなくて、あたしは思わず笑ってしまった。

「でも学校祭ってあつという間だよ。準備してる時が一番楽しいんだって、あたし毎年あとから気づくよ」

「雅行は早く終われって昨日うめいてたけどね」

雅行。思わぬところから名前が出て、あたしはマジックを握る手を止めてしまった。

俺、七海以外とハグしないから。

その言葉が、昨日からずっと、離れない。

抱きしめられたあのとき。雅行の力強さ、汗の香り、息づかい。

ほんの一瞬のことだったはずなのに、深く頭に残ってしまっている。事実上、あれは雅行の告白だった。

いつてしまえば、あたしと雅行は両想い。あのときあたしも喜んでこたえればよかったものを、受け入れられなかった。

あたしは雅行のことが好きだ。そしてたぶん、雅行もあたしのことが好きだ。でもどうして、こんなに落ち着かないのだろう。嬉しいことであるはずなのに。どうして喜べないんだろう。

「…… なっちゃん？」

突然黙り込んでしまったあたしを、啓一くんが不思議そうに見つめてくる。それに曖昧に笑ってみせるけど、彼だって千鶴からある程度聞いているはずだった。

「僕でよければ、話、聞くぐらいはできるよ？　あまり参考にはならないだろうけどね」

そう謙遜して笑う啓一くんは、あたしはありがたく甘えることにした。雅行がどうのとか込み入った話じゃなくて、このぐるぐると巡る思考をどうにかして止めたかった。

「…… 啓一くんは、どうして羽生高に行こうと思ったの？　やっぱり、ハグしたかったから？」

予想した質問とは違ったのだろう、啓一くんはきょとんと目を丸くする。でもすぐにあたしの意図を察してくれたのか、キーボードから手を離してこちらを見た。

「僕は家に近いから羽生高にしたんだよ。なっちゃんと同じ」

啓一くんの答えは意外だった。同好会を作るぐらいなんだから、てつきり千鶴や雅行と同じく、ハグが大好きで入学したと思っていたのに。

「ハグするのとか、抵抗なかった？」

「最初はあるたよ。でも、慣れたらむしろ大歓迎だったかな？」

彼の言葉に、何か裏がある。それを察してしまったあたしが深く訊こうか迷っていると、啓一くん自ら話してくれた。

「正直、最初は下心だったんだよね。女子とハグしたら、やわらかかったりいいにおいがしたり胸があたったりするから。…… なっちゃん、僕も男なんだよ」

ぽかんと口をあけるあたしに、啓一くんが苦笑する。そんなことわざわざ言わなくてもいいのに、と思う心は彼も知っていて言った

わけ。

「でもね。そういう人がいるっていうことも、知っておいたほうがいいよ。実際、チヅだってそういう人に会ったりしたから」

「あ……」

この間のFREEHUGSのとき、千鶴が言っていた人のことだ。あのとき真っ先に千鶴を助けたのは啓一くんで、彼もやはりそのことを覚えていたのだった。

「もちろん、すべての男がそうじゃないからね。雅行を見てたらかるでしょ？ 純粹にハグしてくれる人のほうが多いんだよ。僕もいろんな人とハグしたり、ハグするの見てたりして、それに気づいたんだ」

残りのコーヒー牛乳をすすって、啓一くんは一息つく。登校する生徒が続々と作業を始めだしたのか、廊下の賑わいが聞こえてきた。「で、偶然見たテレビでFREEHUGSを知って、ネットで調べてさ。動画の中でハグしてる人たちが、みんなすごく幸せそうにしてて、それで僕もやってみたいと思ったわけ」

その動画は、あたしも見せてもらった。

もとは、アメリカの一人の青年がはじめたのがきっかけだった。

彼の母親は、たくさんの人々を抱きしめてどんなに『あなた』が大切であるかを伝える素敵な人だった。そんな母を亡くし、大切なことに気づいた青年が、『FREEHUGS』と書かれたボードを持ってマイアミの海岸を歩いたのがはじまり。そしてその輪は今、世界中に広がっている。啓一くんのように、動画を見て影響を受けた人は多い。かくいうあたしだってその一人だ。

「もともと学校ので、ハグの楽しさは知ってたからさ。チヅとか雅行とか、ハグが好きそうな人に声かけたら二つ返事でOKしてくれただよな」

「へえ、知らなかった」

また一粒チョコをもらって、あたしはかりかりと食べる。パソコンの画面で時刻を知った啓一くんが「戻ろっか」と立ち上がったの

で、結局あまり作業はできなかった。

「チツとか雅行がハグしてるの見てたら、なんかこっちまで楽しくなるんだよね。ハグする自分も楽しいしさ。なっちゃんもそう思う？」

「思うよ」

そっか、と啓一くんはまた笑う。本当に彼は落ち着いていて、よく気がつく。あたしが考えていることを、それとなく察してくれていた。

談話室を出て、先に啓一くんと別れて。自分の教室に戻ろうとして、あたしは雅行が先を歩いているのに気がついた。

「はよー、雅行」

誰かが雅行を呼ぶ声。それにおはようと返しながら、雅行が教室に入ってゆく。あたしが教室に入るのをためらっていると、後ろから誰かに猛烈なタツクルをされた。

「おはよう！ 七海」

「あ、千鶴……」

「啓一と談話室で作業してたんだって？ 言ってくれたらチツも行ったのに」

いつもどおりおはようのハグをして、あたしは千鶴のあとに続いて教室に入る。うつむいて教室を見まいとするあたしの様子に気づいたのか、友達とハグを交わしている千鶴が首をかしげた。

おはよう、おはよう。いろんなところで声がする。それはいつものことで、挨拶なんて誰もがすること。雅行もそれにこたえているけど、ハグはしていない。この目で見ていないけど、空気でわかる。教室が戸惑いの空気に満ちている。そりゃあそうだ、雅行がハグをしないなんておかしいことだから。

「おはよー、雅行」

「はよ、千鶴」

千鶴がハグをしようと動いて、あたしはようやく顔をあげた。先に自分の席につこうとしていた雅行に、千鶴が腕を広げてハグしようとする。

「わり、遠慮しとく」

けど彼は、それを拒んだ。

千鶴もそれに戸惑っていた。そしてはっとした様子で、あたしと雅行を見比べた。

「おはよう、七海」

「……おはよう」

あたしに気づいた雅行が、近づいてくる。ハグをしようとする前の、ただの挨拶の時点なのに、あたしは彼の顔を見ることができなかった。のばされた手からも逃げた。

それだけで、クラス中が事態を察したようだった。

ざわめくでも視線を交わすわけでもなく、ああなるほどかと納得したような、安堵の息のようなものが口々に漏れる。なにがあったではなく、そういうことか。ハグをめぐる色恋沙汰は珍しくないし、それでいちいち騒ぎ立てることをみんなはしない。

雅行は無理にハグしようとせず、あきらめて席についた。あたしも大人しく自分の席に座った。

背中に、視線を感じる。もしかしたら見ていないのかもしれないけど、雅行がいると思うと、どうも見られているような気がしてならなかった。

「七海……」

後輩から聞いたのかもしれない。千鶴が声をかけてくる。

あたしはそれに、ただ曖昧に笑うしかなかった。

いまさら雅行になんと言えいいのか。

あたしはトイレの鏡の前に、ボサボサの髪に櫛をいれる。はねたところの水をつけようと蛇口をひねると、指先をすりぬけた水は、排水溝にたまったほかの生徒の髪の毛の間を力なく流れていった。

たった二言、簡単な言葉であるはずなのに、どうしてあたしはそれが言えないのだろう。「好き」とひとこと、あたしはどうして言うことができないんだろう。

すき。そう、二文字。ただ、雅行にそう伝えるだけなのに。言わなくても、雅行は態度で示してくれたのに。

いまさらあたしも好きだなんて、言えるわけがない。

前髪のはえぎわに、ニキビをひとつみつけた。恋をすると女の子は綺麗になるというけど、あたしは恋に悩んで肌や髪がぼろぼろになっている。鏡の中の情けない顔を見て、よけい気がめいった。

なんでこんなに苦しいのだろう。いや、自分で自分の首を絞めていることぐらいわかってる。でも、今更どうすればいいのだろう。

深いため息をつき、あたしはトイレから出た。

廊下に出てまず、学校の変わりぶりに啞然とした。売り子が着る衣装の仕上げを手伝ってから被服室を出て、トイレに行った。そのわずかな時間で、廊下や各教室はパレルワールドに変わっていた。肝だめしをするクラスは教室中に暗幕をはりめぐらせ、ゴミ袋でなにやらのれんをつくっている。中華料理の店を出すクラスは、驚くことに入り口に朱色の鳥居をたてていた。

ちなみにあたしたちのクラスはお菓子の家になる。モデルはヘンゼルとグレーテルで、提案したのは意外にも男子たちだった。かわ

いらしいお菓子を作るのもまた男子の仕事で、あのごつくて大きな手でフルーツパフェやチョコタルトを作るのだというから、想像するだけで笑ってしまう。

すこし時間ができた。教室に戻ろうとして、あたしは足をとめた。クラスみんなの、詮索を入れはしないけど好奇心に満ちたあの視線。あれが非常にいたたまれない。

談話室に行こうかな。あたしはまたひとつため息をついて、階段を下ることにした。

「あ、七海」

でもこういうときにかぎって、会いたくない人と会ってしまう。両手にたくさん模造紙を抱えた雅行が、足取りおぼつかなくのぼってくる途中だった。

「ちょうどいいや。手伝って」

「えーっ」

嫌だ、と言ってしまったえばそれだけのこと。けど、あたしはできない。何より雅行がいつもと変わらない様子で話しかけてくるのだから、変に拒んでしまうことのほうがおかしいに決まっている。

「どうしたの、こんなに大量に」

あたしはしぶしぶ、模造紙を受け取った。

「屋上から垂れ幕にするんだよ。生徒会も人手不足だからさ、これ全部俺ひとりでやんの。頼むから見捨てないで」

代々、生徒会執行部は学校祭になると鬼に変わる。両手に道具を抱えた役員を見たら逃げ出したほうがいいと言われていた……こうしてつかまってしまいうから。

結局あたしは屋上まで荷物を運ぶのを手伝い、おまけに垂れ幕を取り付けるのも手伝う羽目になってしまった。

「雅行……それ、字、逆じゃない？」

「ああ、本当だ」

変な心構えをする以前に、雅行はもうへとへとだった。二年といえど、生徒会では下っ端になる。こき使われているかと思えば、い

やいや三年はもつと重労働だ。

「このままここでさぼりだおしたい……」

「でも仕事はたんまり残ってるんでしょ！」

背の高い屋上のフェンスにしなだれかかる雅行に活を入れ、あたしは模造紙の中から羽生高校祭の大きな布幕を見つける。そしてその下に隠れていたものを見て、ああなるほどとうなずいた。

「だから雅行はこの係になったわけね」

「それはいいから、ちよつと、こつちおさえてよ」

ふいに吹いた風に垂れ幕をさらわれそうになって、あわてて雅行がしがみつく。あたしも手伝って、二人で屋上にもんどりうった。

垂れ幕は当日垂らすらしく、準備は丸めた状態のものを紐でくくって設置するだけ。それでも各クラスの宣伝文句や部活動のPRなどなど飾るものも多く、ひとりでは本当に大変な作業のようだった。

「あー、よかった七海がいて。昨日に引き続き、協力に感謝します」

「そんなお化けみたいな顔されてたら、誰だって手伝うと思うよ」
深々と頭を下げる雅行にひらひらと手をふって、あたしはフェンスから校舎を見下ろした。思いのほか疲れる作業に汗をかいているので、すこしここで風にあたっていたい。

学校祭準備は着々と、校舎外にもすすんでいた。校門には雅行がポスカまみれになって作った看板が。校門から玄関へと続く道では、部活動の屋台が並び始めている。グラウンドの真ん中にはキャンプファイヤーの場所取りでロープが設置されていて、そのまわりでは出来上がったクラスから順に、行灯の土台を組み立てはじめていた。明日はついに学校祭。去年は初めてのことでただけでいっぱいだったけど、二年目の今年ならすこしは楽しめそうな気がする。ぱいだったけど、二年目の今年ならすこしは楽しめそうな気がする。

「あの窓から風船出てるクラス、あたしたちのとこじゃない？」

屋上から見下ろしていると、どこがどの教室かわからない。けれど開け放った窓から色とりどりの風船が紐につながれているのは間違いない。あたしたちのクラスで、そういえば朝に男子たちが顔を真っ赤にしながら空気を入れていたのを思い出した。

「どれどれ？」

「すぐその……あ、飛んだ」

つないでいた紐が切れたらしく、風船がボロボロと外にこぼれだした。かすかに、悲鳴が聞こえてくる。風にあおられて、ヘリウムが入っていないくても風船は空を舞った。

「あーあ、どうするんだろう、あれ」

フェンスに指を絡め、あたしは深く校舎を見下ろす。もたれかかっていたフェンスがふいにきしんで、はっと気づけばもう遅かった。

「ちよつと、雅行！」

「なに？」

「なにじゃなくて！」

フェンスにもたれるあたしを逃がすまいと、雅行はあたしに覆いかぶさるかのように、両腕を突き出してフェンスに手をつけていた。彼は腕が長いから、あたしがいるスペースもそれほど狭くはないけれどまるで後ろから抱きしめられているようで、あたしの身体は自然とこわばっていた。

「どいてよ」

「やだ」

「やだじゃなくて」

「だってハグしてないじゃん」

あたしは身体をぴったりとフェンスに預けて、できるだけ雅行から離れようとした。もちろん顔なんて見れるわけがない。ただうつむいて、風に揺れるスカートの乱れるプリーツを見つめていた。

「別にハグしないたって、近寄るなって言われたわけじゃないし」
まるで耳元でささやかれているような気分だ。あたしはフェンスに絡める指の力をいっそう強くして、あとがつくんじゃないかというぐらい頬を押しつけた。

こんなときでも、胸の鼓動は高鳴る。ときどきしている自分に腹が立つ。赤くなる頬に、身体は正直なのだなと思い知った。

「じゃあ……近寄らないでよ」

「どうして？」

「嫌なの」

「なんでさ」

「嫌なの！」

半ば怒鳴るような声をあげたあたしに、雅行の手が緩んだ。

「なんでだよ。今まで普通に、ハグだつてしてただろ」

「してたよ」

「なのはどうして突然……」

「嫌だつたの」

雅行の手が離れる。それを確認してから、あたしはようやく、彼を振り向いた。

「嫌だつたの、雅行とハグするのが」

「じゃあどうして今まで……」

「言えなかつたの！」

瞳が泳いで、顔を見ることができない。彼のネクタイ、ワイシャツの襟、ズボン、ブレザーのボタン。視線が動いて定まらない。

「言えなかつたの。ずっと、黙ってたの」

雅行のこぶしは強く握られて、ふるえている。そしてふいに動いたかと思うと、あたしは肩をつかまれた。

「離してよ……っ！」

「いやだ」

「離してってば！」

助けを呼ぼうにも、屋上には誰もいない。普段は立ち入り禁止で、しかも鍵を持っているのは雅行ひとり。どんなに叫んでもこの声は誰にも届かない。グラウンドからも、あたしたちの姿は何をしていくかわからない。

雅行はじつとあたしを見つめていた。けれど、あたしはその顔を見返すことができない。何とか腕を振りほどこうと試みているうちに、雅行の影があたしを覆った。

唇を押し付けられて、歯がぶつかりかちりと鳴る。あっという間に抱きすくめられて、また唇をふさがれた。

「……！」

首をよじつて、キスから逃れる。抵抗しようとして、力の差をありありと感じた。

「はなして……！」

今までの雅行は、とてもやさしくハグをしていてくれた。あらためて、それに気づいた。

「そんなに……嫌か？」

低く、絞り出すような声。耳元に息が当たって、あたしは背中がかつと熱くなる。

胸が強く痛んだ。こうして雅行の腕の中にあることが、とても嬉しいはずなのに。それ以上に、痛みのほうが強い。

抱かれている痛みじゃない。抱かれることで感じる、心の痛み。胸を鋭くとがった爪の先で、何度も何度も刺されているような、そんな痛み。

この痛みが消えない限り、あたしは雅行を受け入れることができない。

受け入れたいと思っているのに。わかっているのに。でも痛みだけが、どうしても消えてくれない。

「嫌なの！」

叫びながら、あたしは自らの胸をかきむしった。

「嫌なの嫌なの！ ハグするの、嫌なの！」

まるで子供みたいだった。何度も何度も繰り返すと、そのたびに

雅行の力が増して、あたしの声が次第にかすれていく。

「七海……」

「嫌！ 嫌なの！」

どうしてこんなに痛いんだろう。ハグをしても、それを拒んでも、どうしてあたしの胸はこんなに騒いばかりなんだろう。

どうしてあたしは、素直に好きと言えないんだろう。

「……わかった」

雅行が、離れる。それに安堵の息をついたはずが、あたしの胸はいぜん苦しいままだった。

「ごめん。もう、しない」

名残惜しそうに、ゆっくりと肩から手が離れる。踵を返そうとする雅行の表情を、あたしはようやく見上げることができた。

「まさ……」

「じゃあ、俺、戻るな」

一瞬、目が合う。その雅行の表情。疲労困憊で、今にも泣き出しそうで、ふとした拍子に崩れてしまいそうな、そんな弱々しい表情。唇を噛みそうで、それをこらえるような。ふるえる身体をおさえるような。瞳が揺らいで、まぶたにたまる涙をこらえるような。

「雅行……」

彼は決して振り返ろうとせず、屋上から出て行った。ボタンと扉の閉まる重い音がして、あたしは力が抜け、その場に膝をついた。

痛い。

苦し紛れに、あたしはリボンをはずす。でも痛みは消えない。そんなのわかってる。

不思議と涙は出なかった。むしろ、今自分がしたことに呆然としていた。

雅行を傷つけてしまった。

その事実、今になってようやく気がついた。

彼はあたしを好きとってくれたのに。

あたしはそれを拒んでしまった。

「……もう、やだ」

コンクリートの上にぺたりと座り込んで、あたしは呟いた。頭をかきむしって、両手で顔を覆う。ようやく目頭が熱くなってきたけど、やっぱり涙は出てくれなかった。

どうして自分はこうなんだろう。

タイムマシーンで戻りたい。

うつん、そんなことしないでいい。

戻ったって、いずれはこうなってしまうことだったから。

「どーして七海は、それをチツに相談しないかなー！」

「だって、お互い忙しかったでしょ」

まあそりゃそうなんだけど、千鶴は呟きながらカレーのじゃがいもをほおばった。

「はんははへえ……」

「食べるか喋るかどっちかにしようよ」

最後の一口を豪快に流し込み、千鶴はごちそうさまと手を合わせる。そして牛乳を飲み干してから、あらためて「なんだかねえ」と言った。

「七海は、本っ当に不器用だよな」

「そうだね……」

あたしは食欲がなくて、残した。小さな折りたたみテーブルの上には、二人ぶんのカレーと牛乳と、サラダの入ったお皿が並んでいた。

学校祭の前日準備もどうにか終わり、あたしの家には千鶴が泊まりに来た。電車でけっこうな時間がかかるところに住んでいる千鶴は、明日の朝早くからのハードなスケジュールを考えて、学校に近

いあたしの家に泊まることになったのだ。

もちろん明日の朝だけではなく、今日も夜通しする作業がある。それをふたりで片付けるためにも、缶コーヒーとガムをたくさん買い占めて、今日は徹夜を決め込んでいた。

「今日は雅行、啓一のとこに泊まるはずだよ」

「そつか。啓一くんも家近いもんね」

あちらではあちらの作業がある。はたして男子二人で徹夜となると、一体どんな会話が生まれるんだろう。

「これから行ってみる？」

「今日は作業をするんでしょうが」

空になったお皿を台所にさげ、あたしたちはそれぞれ手に道具を持ち、あーでもないこーでもないで討論しながら作業を開始した。

ただし。テレビはつけっぱなしで魅惑のお菓子もならべ放題だから、作業効率はまだよりよくない。

「……ねえ、七海」

「なに？」

「七海は、雅行のこと嫌いななの？」

訊かれて、あたしは手を止める。手に持ったマジックが乾いてしまわないよう、ふたを閉めた。

「嫌いじゃないよ」

「嫌いじゃないなら、どうして拒むの？」

手の甲にも平にも指先にも、いたるところについた色とりどりのインク。それをティッシュでこすりながら、あたしは必死に言葉を探した。

テレビ画面の向こうでは、バラエティ番組の笑い声が聞こえてくる。とっさに会話をそちらにずらすとしたら、勘のいい千鶴に消されてしまった。

「七海としかハグしないって言ったってことは、雅行は七海のことが好きって言ったってことなんだよ？」

「それは……わかってる」

うつむくあたしを覗き込むように、千鶴が顔を近づけてくる。さつき食べたカレーと一緒に、やつぱり、たんぽぽの香りがした。

「七海も、雅行のことが好きなんでしょ？」

「好きだよ」

その答えに迷いはなかった。あたしは雅行のことが好き。それはどんなにこらえたとしても、あふれ出てきてしまう感情だった。

「好きなのに、どうして？」

「あたしも、よくわかんないの」

もしあたしが千鶴だったら。きつと迷わずに自分の気持ちを伝えることができたのだと思う。

じゃああたしは、どうして言えないんだろう。どうして拒んでしまっただろう。

「七海は、ハグするの、嫌いなの？」

「嫌いじゃないよ。最初は苦手だったけど、今は羽生高にきてよかったなって思ってる」

もし違う高校を選んでいたら、あたしはハグをすることもなかったし、千鶴という友達もできなかった。FREEHUGSという活動も知らなかった。

なにより、雅行と出会うこともなかったんだから。

「ただ、雅行とハグするのが、なんかだめなんだ……」

「だめって、どんなふうに？」

「こうね、ここらへんが、すごく痛くなる」

自分の胸をとんと指さして、あたしは苦笑した。

痛みの原因はわかってる。これは雅行のことが好きな気持ちだった。

「最初はさ、ここがきゅんってなってたの。ハグしたときとか、話したときとか、目があっただけでもそうなって、すごく嬉しかったの」

でもね。あたしは言葉を切る。千鶴は唇を変な形にまげて、何か言いたそうなのをこらえていた。

「そのうち、雅行がほかの子とも……千鶴とハグしてるのを見てるだけでも、ここがざわつくようになったの。きゅんっていうのをとおりにしてさ、痛くなって、その痛みがどんどん強くなって、自分とハグするときもそうなるようになったの。それで、我慢できなくなっ……」

「だからそれは、雅行がほかの子たちとするのが嫌だったんでしょ？」

「自分にされるのも嫌なの」

「自分もほかの子と同じなのが嫌だったんじゃない？ やきもちやいて、自分が特別になりたかったんじゃないの？」

千鶴の言うことはそのとおり。彼女はあたしよりもずっと、いろんなことを知っている。

あたしはただの、恋愛臆病者だ。

「雅行がほかの人とハグしないって言ったってことは、七海が特別だってことなんだよ？」

「それは……わかってる」

「じゃあどうして、それを拒むの？」

千鶴の口調は、まるで子供を諭すようだった。七海ちゃん、どうしてそんなにへそまげてるの？ みんなと一緒に遊ぼうよ。

「だってあたし、雅行が好きなんだもん」

意味がわからないと、千鶴が首をかしげた。

「あたし、雅行が好きなの」

雅行が好き。なにより、ハグをしているときの雅行が好き。

朝、みんなにハグをする雅行。同好会で駅前に行って、小さな子や他校の生徒や、いろんな人にハグをする雅行。ときには仲間とじやれあつて、ふざけあつてハグをする雅行。

ハグをしているときの、あの笑顔が好きだった。身体を離して目があったときの、あの純粋な笑顔が好きだった。見ているこちらまで思わず笑ってしまうような、そんな明るい雅行が好きだった。

「ハグをしているのが好きなのに、なのにそれをあたしがとりあげるなんて、おかしいもん」

「七海……」

ほかの人とハグするのが嫌。自分が一番じゃないと嫌。でもそれはただのあたしのわがままだ。ハグをしている彼を見て好きになったのに。雅行が何より大事に思っているハグをとりあげてしまうなんて、あたしはなんて矛盾してるんだらう。

「こんなにわがままなのに、雅行と付き合つとか、そういうのが許

せないの」

ひどく捻じ曲がった心だと思う。雅行を独り占めしたくて、ほかの子と話しているのも嫌で、それぐらい独占したくて。そんな自分がひどくねじくれている気がしてならない。

うつむくあたしの頭を、千鶴がそつと撫でてくれる。そして何度かあたしの名前を呼び、いつもとはまるで違う、やわらかいハグをしてくれた。

「だいじょーぶ、七海。恋する女の子はみんなそうなんだよ」

「千鶴……」

「チヅだつてそうだもん。好きな人には自分のことを見てもらいたいつて思うし、誰かほかの子とハグしてるのを見るとやっぱり、相手が七海でもむつとしちゃうことだつてあつたよ。それは普通のことなんだよ」

そつえば、千鶴の好きな人つて誰なんだろう。自分のことばかりで、あたしは全然気づかなかった。

「そんなに思いつめなくても大丈夫だよ。チヅから見たら、七海はわがままなんかじゃなくて、恋に悩むかーわいい女の子だから」

ねつ。だからそんな顔しないで。あたしを抱きしめたまま、千鶴は身体を揺らす。まるでゆりかごのようなやさしい揺れに、あたしはそつとまぶたを閉じた。

「……雅行は、あたしの気持ち知ってるのかな？」

「知らないと思うなー。雅行は七海と同じで、不器用で鈍感だからね」

くすくすと笑う千鶴の吐息が耳に響く。これじゃあ本当にあたしは赤ん坊だ。けれど千鶴の腕の中はとてもあたたかくて、あたしは安心して身体をあずけることができた。

「でもあたしは、雅行みたいに明るくないよ」

「そっかなあ……」

うーんと、彼女はなにやら思案している。これを話すべきか話すまいか。ふつくらとした唇をもごもごさせて、やがてあたしに口を

開いてくれた。

「チヅも雅行も、わざわざ遠い中学からハグ高選んだでしょ？ 雅行はね、中学校の頃は、今みたいにはつらつとはしてなかったんだよ」

「……そうなの？」

「別に暗かったわけでもないんだけどね。でも絶対、自分からハグするようになつてはなかったんだ。チヅが思うに、雅行、いつだか自分からみんなにハグしたことあったじゃない？ あのとき心の中ではすごい緊張してたと思うんだよね」

一年前の、あの朝の日。あのとき交わしたハグがなかったら、あたしはきつと雅行のことを好きにならなかった。

「でも雅行、その前から千鶴とすごい仲良かったじゃない」

「それは中学が一緒だったからだよ。七海の目にはそう映ったのかもしれないけど、まあ雅行も知らない人たちの輪に入って、とつさに知ってるチヅに声をかけたんだろっね」

雅行が高校にあがってから積極的に動くようになったことに、千鶴は特別なかを言うこともなく普通に接していた。彼女の口から中学の雅行のことを聞いたのは、これが初めてだった。

「雅行も雅行なりに、いろいろ考えてたと思うよ。だからきつと、七海にしかハグしないって言ったのだって、ちゃんとした意思があったからだと思うの」

「そう、だよな……」

その雅行を、あたしは拒んでしまった。傷つけてしまった。そのことが何よりも今、心に引かかってとても辛い。

屋上で重ねた唇の感覚は、やわらかいというよりも、あたった歯の痛みの方が強かった。唇も切れていたようで、今は乾いたところからかすかに血の味がする。

あんな雅行見たことがなかった。あれほど感情をむき出しにして、傷ついた表情もあらわにすることなんて今までなかった。いつも笑っているから柔和に見えるけど、本当は鋭いまなざしを秘めていた

ことを知った。

あの、泣き出しそうな瞳。それがまぶたに焼き付いて離れない。

「雅行にあやまらなきゃ……」

「あやまる？ どうして？」

「だってあたし、雅行のこと傷つけちゃった」

そうかなあ。千鶴は呟きながら、あたしから身体を離れた。

「だって七海だって、傷つけたくて傷つけたわけじゃないんでしょ？ 別にあやまることじゃないと思うけど」

「でも……」

「まあ、これはチツと七海の考えかたの違いかな？」

肩をすくめて、千鶴が身体を離す。複雑な表情を浮かべるあたしの顔を覗き込んで、両手で肩を叩いた。

「んじゃ、作業の続きしようよ。明日までにいっぱい作らなきゃ」

そして最後にひとつ、ハグ。

そのハグは彼女らしい、力強く優しい抱擁だった。

4

ついに学校祭当日になり、開け放たれた校門から他校の生徒や保護者がたくさんはいつてくる。いつも授業中はしんとしているはずの廊下が、今日はとてもにぎわっていた。

わが2Bの模擬店は、そこそこに繁盛していた。

とにかく客層を若い女の子に絞ったおかげで、店の内装も外装もお菓子の家ととにかく甘い雰囲気ですべて統一されている。さらに店に出すデザートも甘くしたら、なぜだか体重を気にする女子よりも、疲れた身体に栄養補給する男子たちがたくさん集まってしまった。

前売り券のぶんをのぞいた当日売りも好調で、午後の部での完売も見込めそうだ。

あたしは午前の部の売り子担当で、ようやく交代を終え、つまみぐいしすぎてお腹いっぱいになった身体をずるずると引きずって教室を後にした。

店がお菓子の家なら、やっぱり売り子はヘンゼルとグレーテル。でも多すぎてもいけないので、魔女もいる。あたしの衣装は魔女用で、サテン生地我真つ黒なマントを頭からすっぽりとかぶっていた。ちなみに中はいつもの制服だけど、あえてマントは脱がない。そもそも学校祭当日は私服OKで、気合を入れて浴衣を着てきたクラスメイトもいた。でもあたしがこうして魔女の格好のままでいれば、いやがおうでも目を引いて、お菓子の家の宣伝にもつながるのだから脱がない手はない。

千鶴とは開会式まで一緒にいたけれど、各クラス・部活ごとの活動になったところで別れた。女バレの屋台で、たしか千鶴も午前の売り子担当だったはずだ。

啓一くんのオークション監視も午前中で、もう交代したはず。みんなで時間を合わせていた。雅行はさすがに生徒会で無理だろうけど、どうせやるならみんなでやりたい。

リノリウムの廊下を歩いた際に、マントがひきずられて衣擦れの音がする。魔女の手には赤いりんごが入ったカゴを持たされたけど、これじゃあ白雪姫の世界だ。それと一緒にあたしは大きなバッグを肩に下げ、途中で前売り券を買っていた商品ももらいながら、玄関へと向かった。

靴を履き替えていると、体育館からベース音が響いてくる。スケジュールだとたしか今はバンド発表とカラオケ大会だけど、あたしはそれには目もくれなかった。ローファアのかかとを直すのもどかしく、校舎から出た。

まず玄関に、学校祭のポスター。それから校門までの道に、各部活動の屋台。女バレは焼きそば屋台で、サッカー部のたこ焼き屋の

も入り混じって、ソースの香りが校庭に広がっていた。

さすがに校舎から出ると、魔女を見てみんなが驚いていた。でもあたしは気にしない。きよろきよろとあたりを見回して、約束の目印を探していた。

「いた」

校門近くの千鶴に、大きく手を振る。千鶴は魔女のままのあたしを見て笑ったけれど、頭上にボードを抱えてぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

「七海、後ろ、見てみて！」

「後ろ？」

言われて、あたしは振り向く。けど、屋台やお客さんのほかには何もない。首をかしげると、「もつと上！」と言われた。

上。なんだろう。風にはためく学校祭の垂れ幕を見て、あたしはすぐに、気づいた。

「さすが、雅行」

思わず、口からこぼれる。千鶴を真似して、あたしも両手を上にあげた。

フェンスの根元に取り付ける垂れ幕は、当日におろされる。その役目も雅行の仕事。だから雅行はそのときに、このゲリラを敢行したのだ。

end

校舎の端から端まで、フェンスは広くはりめぐらされている。そこにかけられた垂れ幕。羽生学園祭とか、2Bメルヘンづくしのお菓子の家、とか。

そんな垂れ幕を覆い隠すように、黒い布がいくつもかけられていた。

I HUG YOU !

背の高いフェンスをまるまる使った、遠くから見ても良く目立つ文字。この校門をくぐった人が、一番最初に目につく、迫力のある黒い文字がそこにはあった。

雅行の担当はこれだった。生徒会と並行しながら、この巨大文字を作る。そして当日、垂れ幕を下ろすと一緒に、この文字もとりつけた。たぶんあのはがれかかっているところはゴミ袋だ。

「七海、ほら、早く出して！」

「あ、うん！」

千鶴にせかされて、あたしはバッグからいくつも紙を取り出した。画用紙、スケッチブック、ダンボール。色とりどりのペンで、いろんな言葉をこめて、それを飛び入り参加の人たちに配って歩く。

書いている言葉。それはあたしたちがいつも、駅前で掲げている合言葉。

FREE HUGS

学校祭の活動許可がおりなかったあたしたちFREEHUGS同好会は、こうしてゲリラでFREEHUGS活動することを計画していた。

校門のほかにも、いろんなところで会員たちが活動をおこなっているはず。あたしたちの担当はこの校門前。学校祭に来てくれる他校の人や保護者の人たちに、FREEHUGSを知ってもらうのが狙いだっただ。

活動をしているうちに、ほかの生徒たちも混じって来ていたらしい。ボードをひったくったサッカー部の男子が、店の看板と一緒に、ボードを掲げている。するとたこ焼きを買ってくれた小さな男の子が興味を示して、部員とハグをした。

そんな光景が、あちこちで見られた。

「I HUG YOU !か……懐かしいね」

「この学校の生徒はみんな、最初にこれを見るからね」

今日の千鶴はソースの香りがする。彼女の言うとおり、羽生高の生徒は入学式のときに、必ずこの文字を目にしていた。

本当はフェンスじゃなく、校門に面した三学年の窓なのだけど、さすがにゲリラで三年の教室に忍び込むのは難しい。来年は三年生の教室にあがったあたしたちが、まったく同じ言葉を窓ガラスに貼り付けて、新入生の歓迎をする番だった。

「……なっちゃん、それ、コスプレ？」

「あ、こわかった？」

啓一くんの活動は、自分や学校のHPで、学校祭の日にFREEHUGSをしますよ！と宣伝すること。同好会の頭は、それぞれ役割を持ってこの日に臨んでいた。

「いいいいいよ、その格好のままハグしようよ」

笑いをこらえながら、啓一くんがあたしに腕をまわしてハグをする。頬にFREEHUGSのペイントをした啓一くんも、いつもより浮き足立っているような感じがした。

千鶴ともハグをして、あたしは彼女の肩こしに、花壇を見る。いつもは学校の入り口で鮮やかな花壇だけど、今日ばかりはその役目もお休みだった。

そのレンガの上に、腰をかけている人がひとり。手にボードを持

って、ぼんやりと、学校祭にやってくる人々をながめていた。

あたしは彼を見て、ぽつりと呟いた。

「……雅行」

雅行はあたしに気づかず、ボードにあごを乗せて、いつものあたしのようにただ人通りを眺めていた。

「もしかして雅行……ハグしてないの？」

「してないよ。誰とも」

そもそもこのゲリラは雅行の計画だったのに。

やりたいやりたいと言いだしたっぺだった雅行は、誰よりも大変な仕事を引き受けた。衣装を縫う女子たちが、魔女用の布が少ないと言っていたけど、たぶんあれは雅行の仕業だ。

誰よりも今日を楽しみにしていたはずなのに、雅行はまったく動いていない。てつきりあつちこつちでハグをしまくっているものだと思っていたあたしは、ただただ見つめることしかできなかった。

あたしとしか、ハグをしない。

彼はいまだに、あの宣言を守り続けていた。

本当は活動をめいっぱい楽しみたいはずなのに。うずうずと落ち着かないようで、おしりが動いている。けれど決してその場から立ち上がらず、ボードをかざしたりして、主にお客さんの目を引くことに専念している。

屋台の人たちに協力してもらって、千鶴は昨日あたしとつくった飾りを取り付け終えていた。無地のＴシャツに殴り書きしたり、風船にかわいらしくペイントしたりして、とにかくいろんな飾りを用意した。FREEDUGS。その言葉があちこちにあって、みんな興味深そうにしている。

どれも、雅行の提案だった。彼が言わなければたぶんできなかった。その彼がやらないなんて、おかしい光景だった。

もちろんそうなる原因をつくったのはこのあたしで。雅行がした

いことを、彼が生き生きと輝く瞬間を、あたしが抑えさせてしまっているわけで。

みんなと話して笑いあう陰で、雅行がこっそりため息をついていた。あいかわらず顔も身体もボロボロで、そういえば生徒会はどうしたんだろう。

言わなくちゃ。雅行に、ハグをしてと言わなくちゃ。

好きなことを我慢しないで。

雅行は、好きなことをしているときが一番、輝いているのだから。あたしはボードを胸に抱えて、彼に近づいた。

近づいてきた黒ずくめの魔女を見て、雅行は一瞬、驚く。けれどそれが仮装したあたしだと気づいて、すぐに立ち上がった。

「七海、その格好……そうか、模擬店か」

「生徒会は、いいの？」

「いいんだ。俺、これをするために前日までがむしゃらに頑張ったんだし」

眠い目もすっかり冴えているようで、その瞳はららんと輝いている。そして彼はあたしがなにか言いよんでいることに気づいて、「ん？」と首をかしげた。

言わなくちゃ。

でも、ここまで来るともう、何を言っていいたかわからない。

「……ななみ？」

雅行が近づいてくる。一步、二歩。どうしようで頭がいっぱいになつて、あたしはとつさに、ボードを前につきだした。

おっ、と、雅行が驚く。あたしが使い続けているスケッチブックのハグボード。それを盾のようにして、あたしは雅行と距離を置いてしまう。

ちらりと顔を見ると、雅行はにこっと笑ってくれた。どうして昨日の今日で、そんな表情ができるんだろう。どうして何事もなかったかのように、あたしに接してくれるんだろう。

胸が、つまる。かっとなくなって、いつもの痛みによく似ている。

それをなだめようと一息ついて、あたしは顔をあげた。

「雅行……これ」

「これ？」

意味がわからず、彼はまた、首をかしげる。だからあたしは、もう一度、ボードを突き出す。

どうして素直に言えないんだろう。どうしてあたしはここまで意地っ張りなんだろう。

ふるえる手に力をこめて、あたしはボードを片手に持ちかえる。両手を広げて、文字を見せるように、いつものようにハグのアピールをした。

雅行はようやく、はつとした表情を浮かべた。その鈍さに思わず、あたしは笑ってしまう。そして雅行に一步、近づいた。

おそろおそろといった様子で、あたしたちは歩み寄る。むしろ雅行はほとんど動いていなくて、あたしの歩幅のほうが大きかった。

戸惑っていた雅行も、ボードを置いて、腕を広げる。でも、自信がないようで、そのままかたまっていた。

あたしは自分から、雅行に腕をまわした。

「七海……？」

ぎこちなく、彼は腕をまわしてくる。まるで、初めてハグをした人同士のようだった。

遠慮がちな弱々しい力を、ほんのすこしだけこめて、雅行を抱きしめる。そしてすぐに離れて、上目づかいに彼を見上げた。

雅行はきょとんとしていた。まるで何があったかわからないようだった。そして真っ赤になるあたしの顔を見るうちに、ようやく理解して、ぱつと笑顔になった。

そして今度は、雅行からハグ。それは控えめではなく、思う存分といったような、そんな力がこもっていた。

ハグと一緒に、挨拶のように頬と頬をすりあわせてくる。そしてまた離れて、目があつて、思わずふたりで笑ってしまった。

「あたし、雅行が好き」

彼が口を開く前に、あたしは言った。

「雅行が好きなの」

傷つけてごめんなさい。

雅行、もう、我慢しないで。

言つべきことはたくさんあるはずなのに、はじめに口を出たのはそれだった。

なによりまず、伝えなければ。雅行は伝えてくれたのだから。あたしも伝えなければ。

でも何の言葉よりも、こうして抱き合えることのほうが、気持ち伝わる気がした。

雅行の腕の中で、また、あの痛みがぶり返す。けれど彼の鼓動を聞くたびに、それがおさまってゆくのがわかる。

どうしてだろう。あれほど落ち着かなかったはずの腕の中にいるのが、一番安心するなんて。

雅行の鼓動が、とても早い。息もふるえている。汗の香りに包まれて、でもそれが嫌じゃない。

痛む胸が次第に麻痺して、心地よくなってくる。ああこれが、好きという感情なんだなとしみじみ思った。

こわかったの。やきもちやいてたの。ずるいことに、あたしの口からはそんな言葉も出てこない。また身体が離れて、あたしたちは手をつないで向かい合う。なんだか照れくさくて、下を向くと、また抱きしめられた。

みんなが見てる。そんなのどうでもいい。だってみんな、ここではハグをしているのだから。

雅行の肩からちょこんと目を出せば、あたしたちのハグを見て驚いた人たちに、ほかの会員が声をかけている。看板を見せて、どうですか？ 興味を持っているのは他校の子で、一人の子が勇気を持って飛び出し、ハグをして興奮気味に戻っていった。

長い長い抱擁を続けるあたしたちは、さすがに目立っているようだった。でもそれにつられて、みんながハグをしている。まるでハ

グの連鎖反応で、気づけば千鶴と啓一くんもハグをしていた。

そのハグを見て、あたしはおやと思う。千鶴が啓一くんの首に腕をまわして、人目もはばからずにキスをした。そうかふたりは付き合っていたんだ。

思わず、ふふふと笑ってしまう。二人に背を向けている雅行はそれに気づかないまま、まるであたしを味わうように、耳元に唇を寄せてくる。

言わなきゃいけないことがたくさんある。

でも、もう少しだけこうしていたい。

七海、と、声になりきらない声でそうささやかれて、あたしは優越感に浸ってしまう。雅行がハグをする人たちはみんな、こんなこととされないに決まっている。

雅行がまた、身体を離す。彼もまた何かを言おうとして、でも言葉が見つからないみたいだった。

何か言わなきゃ。そう考えている雅行が、あたしは無性に愛しく思えてたまらない。

「好き」

あたしは雅行の首に手をのばし、すこしだけ背伸びをする。

「あたし、雅行が好き」

ささやきながら、そっと、唇を重ねた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5732j/>

Hugging You!

2010年10月8日15時24分発行